

坂本龍一×大友良英 対談

札幌

札幌国際芸術祭って？ SIAFって？

国際



現代アートの注目トピックスは？

メディアアートの注目作品は？

芸術祭

Sapporo International Art Festival Since 2014

ってなに？

札幌国際芸術祭って？

サイアフ
SIAFって？

いろいろききたい

ききたがりくん

国際芸術祭って
なに？

A 「いま」活躍している
アーティストの作品が
世界中から集結
します。

なぜ札幌で
国際芸術祭！？

A 札幌のまちをつくるのは
ひとびとの「アイデア」だと
考えているからです。

ひとびとのアイデアや創造力は社会活動や経済活動を行ううえで貴重な「資源」と考えられていて、世界でも多くの都市がこの資源をまちづくりに活用しようとしています。
アートやデザインが感性を刺激して、たくさんのアイデアが生まれること。またそれを介してさまざまな出会いや交流が生まれること。
札幌市は、創造性のある「ひと」が「まち」をつくり、創造性ある「まち」が「ひと」を育てる、という考えのもと、札幌の創造性を高める大きな機会として、札幌国際芸術祭を開催しています。

札幌はここ！



参考：創造都市さっぽろ
(<https://www.city.sapporo.jp/kikaku/creativecity/creativecity/index.html>)

モネ、ゴッホ、ピカソ、日本でも岡本太郎、草間彌生など、世界中、さまざまな時代でたくさんの芸術家(=アーティスト)が活躍してきました。

そして、「いま」活躍しているアーティストの作品が、世界中から集結するのが芸術祭です。

アーティストが、いまの時代だからこそ考えることや感じることをかたちにし、新しいことを試して作品として芸術祭の場で発表します。また、多くの芸術祭ではテーマを設定し、それにふさわしい作品が紹介されます。

特定の会場だけでなく、まちや地域全体が舞台となる芸術祭が世界には数多くあります。

最も歴史のある国際芸術祭は1895年にイタリア・ヴェネチアで始まりました*。現在は横浜や瀬戸内など、日本でも各地で国際芸術祭が開催されています。

* ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展



札幌国際芸術祭(SIAF)は
どんなことをしているの？

A 開催は3年に一度。
いまの技術を活用したアート作品も紹介。

札幌国際芸術祭(Sapporo International Art Festival 略称:SIAF)は3年に一度、札幌を舞台に開催される芸術の祭典で、2014年に初めて開催しました。
SIAFは、絵画や彫刻のような、長い歴史のある作品だけでなく、コンピュータなどのデジタル機器や、インターネットなどの通信技術によって変化した社会や生活、人間のありようをテーマにした「メディアアート」と呼ばれる作品を多く紹介しているのも特徴です*。

*札幌市はユネスコ(国際連合教育科学文化機関)創造都市ネットワークに「メディアアーツ都市」として、世界で2番目、アジアで初めて加盟が認定されています。

それで……
SIAFは面白いの？

A 作品や体験が盛りだくさん。
見て、参加して、
SIAFにふれて欲しい！

SIAFではバラエティーに富んだたくさんの芸術作品に出会えます。
お気に入りの作品や、会場ごとの特徴などを見つけてみると、楽しみが広がります。
アーティストがSIAFのためだけに作った作品も多く、会期が終わると二度と札幌では見ることができない貴重なものもあります。
また、作品を解説するガイドツアーや参加型のワークショップなど、たくさんのイベントやプログラムを通して、作品を「見る」だけではなく「参加」して楽しむことができます。

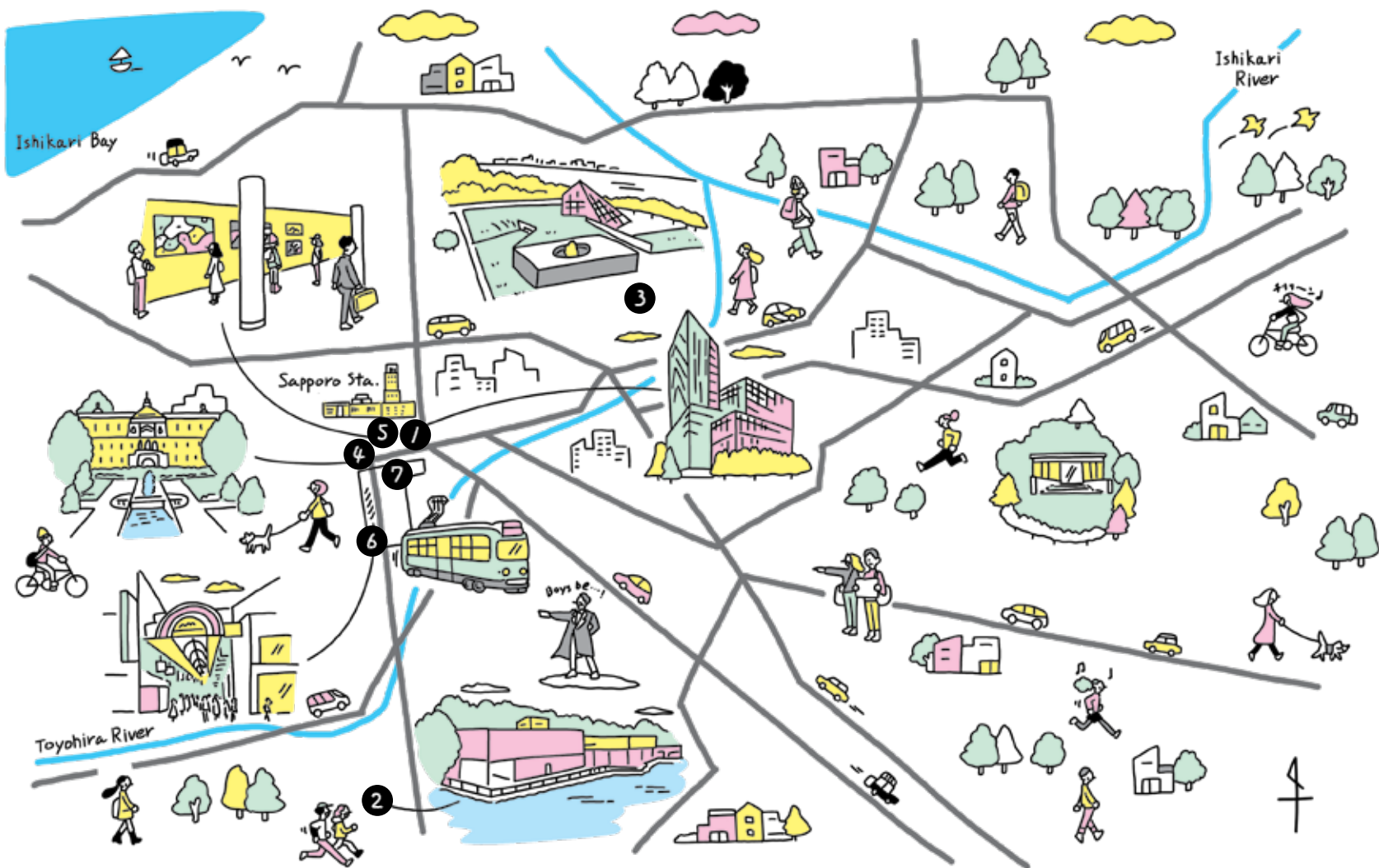


会場 紹介

美術館から電車の中まで — 芸術祭は会場だっておもしろい！

アートを鑑賞することができるのは美術館だけではありません。
札幌国際芸術祭(SIAF)では、市内のあらゆる場所が会場になります。

※●～●はSIAF2014・2017の会場、およびSIAF2020で予定していた会場。



① 札幌市民交流プラザ

2018年、札幌の中心部にオープンした
新たな文化芸術拠点。

SIAF2020では幻のメディアアート作品
《Senster》(センスター)を展示予定でした。

② 札幌芸術の森

自然豊かなロケーションで札幌の四季と
アートを味わう特別な体験を。

SIAFでは音にゆっくりと耳を澄ませる
作品など、静かな森にぴったりの展示を
行いました。

③ モエレ沼公園

公園そのものが作品！

世界的な彫刻家イサム・ノグチの遺作。
ガラスのピラミッドではSIAFを象徴する
ようなメディアアート作品が展開され
ました。

④ 札幌市資料館(旧札幌控訴院)

大通公園の西に面する文化財建造物。
館内にはSIAFの情報を発信する
「SIAFラウンジ」も常設されています。

⑤ 札幌駅前通地下歩行空間 チ・カ・ホ

さっぽろ駅と大通駅を地下でつなぐ
メインストリート。

通勤・通学の途中でも自由に作品鑑賞が
楽しめる会場として活躍しました。

⑥ 狸小路商店街

買い物客を雪から守る、アーケードで
覆われた北海道最古の商店街。

おみやげ屋さんや映画館など
さまざまな店舗が会場になりました。

⑦ 札幌市電

中心部から西側エリアを通して
すすきのへぐりと回る札幌市電。

走る車両の中で、演劇や音楽ライブ、
ラジオ放送なども行いました。

SIAFで知る

現代アートの 注目トピックスは？

芸術祭では、最新の現代アートをたくさん鑑賞することができます。社会の課題や歴史、環境など、私たちの生活に直接結びついているテーマを扱うことも多い現代アート。市民参加型のプロジェクトや、「アート」のジャンルを飛び越えるようなものも。きっと忘れられない作品に出会えます。

* 掲載作品は、これまでのSIAFに出品された作品です。



お話をきいた人
飯田志保子
キュレーター



A スポード・グプタ
《ライン・オブ・コントロール(1)》2008
Photo: Keizo Kioku
Courtesy of the artist and Arario Gallery



C 端聡《液体は熱エネルギーにより
気体となり、冷えて液体に戻る。
そうあるべきだ。2017》2017
Photo: Yoshisato Komaki



B 岡部昌生
《YUBARI MATRIX 1992-2014》
2014
Photo: Keizo Kioku

時代と地域社会に応答する

現代アートに焦点を当てた国内外の国際芸術祭では、社会、政治、経済、環境など各地域の問題と時代を反映した作品が多く紹介されます。たとえばスポード・グプタはインドの現実を、食器や台所用品を集積したキノコ雲の彫刻で多様な角度から迫力満点に表しました(A)。岡部昌生は北海道の炭礦の歴史をひも解き(B)、端聡は物質の変化と循環をテーマにしました(C)。戦争・紛争、移民・難民、原子力やエコロジーの問題、あらゆる差別や搾取に対する抵抗といった大きく重いテーマが扱われることもしばしばですが、現代アートはローカルな視点を入口に、グローバルな課題を話し合う機会をもたらします。過去から学び、未来を展望する現代アートによって時代と地域社会を定点観測するのが、周期開催される国際芸術祭の意義なのです。

市民も参加

市民参加を促す現代アートは、同じ時代を生きる人々が作品やプロジェクトの経験を共有します。「市民」は作者と鑑賞者、ホストとゲストという線引きを超えて、「同時代の社会に参加する人」を意味します。好例はSIAF2014の「フェスティバルFUKUSHIMA! 北3条広場で盆踊り」と、それを契機に毎年開催されている「さっぽろ八月祭」、そしてこの二つが合体したSIAF2017前夜祭「さっぽろ八月祭2017」(D)。東日本大震災と福島第一原発事故に端を発し、大友良英も一員の「プロジェクトFUKUSHIMA!」が各地で開催してきたプロジェクトは、時代と地域社会に応答しながら、内外の「市民」参加によって札幌に新たな盆踊り文化を創出しました。参加型の現代アートは、市民が芸術の担い手であるという当事者意識(オーナーシップ)を育み、芸術祭が地域に根づく大事な要因となります。



E 中谷宇吉郎
《天然雪・人工雪の写真》1933-39
Photo: Keizo Kioku



F 中谷英二
《FOGSCAPE #47412》
2014
Photo: Keizo Kioku

G カールステン・ニコライ
《スノー・ノイズ》2001
Photo: Keizo Kioku



D SIAF2017前夜祭「さっぽろ八月祭2017」
Photo: Yoshisato Komaki

ジャンルを超えたコラボレーション

表現は必ずしも美術、音楽、演劇、文学などジャンルの枠に収まるものではなく、科学者や医者も探求する専門領域を掘り下げる過程で芸術的な産物を作り出すことがあるでしょう。SIAF2014では、北大で教鞭をとった実験物理学者・中谷宇吉郎の研究資料だった雪の結晶の写真に芸術的な価値を見出しました。高解像度でデジタル化したそれらの写真を、博士の次女で国際的に著名なアーティスト中谷英二子による「霧の彫刻」、そしてカールステン・ニコライと高谷史郎がそれぞれ博士の研究から触発された作品とともに展示し、札幌ならではの芸術と科学のコラボレーションが実現しました(E~H)。SIAF2017でもARTSAT×SIAFラボが、成層圏に打ち上げた気球から送り返された信号によって、モエレ沼公園を空(宇宙)から彫刻作品として見る壮大なプロジェクトを実施しました(I)。こうした多領域横断のコラボレーションが芸術の可能性を豊かに拓きます。



H 高谷史郎《Ice Core》2005
Photo: Keizo Kioku



I ARTSAT×SIAFラボ
《Sculpture for All of the Intelligence
全知性のための彫刻》2017

A・B・E・G・H 北海道立近代美術館
C 北専プラザ佐野ビル5階
D 札幌市北3条広場(アカブラ)
F 札幌芸術の森美術館
I モエレ沼公園

SIAFで知る

メディアアートの注目作品は？

「メディアアーツ都市」札幌で開かれる札幌国際芸術祭(SIAF)は、メディアアートを大きな柱のひとつとしています。メディアアートとは、見る、聴く、触る、身体で感じるといった感覚をベースに、さまざまなものをメディアとしてとらえた作品のこと。つららまで「環境メディア」としてアート作品になります。メディアアートに触れる第一歩は、ぜひSIAFで。

*掲載作品は、これまでのSIAFに出展、もしくは出展予定だった作品です。

知覚を拓ける

古くから顕微鏡や望遠鏡、印刷術や蓄音器といった新たな技術によって、人間の知覚—見ることや聞くことは、大きく拡張され、また変容してきました。90年代のパーソナル・コンピュータの普及や、ウェブやヴァーチャル・リアリティ技術の登場によって生まれたメディアアートも同じです。SIAF2014ゲストディレクターの坂本龍一と真鍋大度による《センシングストリームズ—不可視、不可聴》(A)は、人間が知覚できない電磁波を音と映像に変換して、私たちをとりまく不可知の環境について考えさせてくれる作品です。



お話を聞いた人
久保田晃弘
多摩美術大学 教授/
アートアーカイブセンター所長



A 坂本龍一＋真鍋大度
《センシングストリームズ—不可視、不可聴》
2014
Photo: Keizo Kioku

科学や数学も扱う

メディアアートにとって、科学や数学とのコラボレーションも重要です。SIAF2017のプレイイベントとして展示された平川紀道の《datum》(B)は、現代物理学が明らかにしつつある、高次元空間における美をテーマとした映像音響インスタレーションです。私たちの周りには、電磁波や高次元の世界など、多くの見知らぬ自然があるのです。

SIAF2020で展示予定だった三上晴子の《欲望のコード》(C)も、現代社会を形づくる不可知の環境をテーマにした作品です。スマートフォンによって常に収集され、監視されている私たちの欲望を、生き物のように蠢く壁面と、触覚のように動くサーチアーム、そして監視カメラの複眼映像という3つのデバイスによって身体的、空間的に表現しています。



B 平川紀道《datum》2017



C 三上晴子《欲望のコード》2010
Photo: Ryuichi Maruo (YCAM)
写真提供: 山口情報芸術センター [YCAM]

環境もアート

「都市と自然」を基本テーマに掲げるSIAFでは、こうした環境と呼応する芸術に、多くの作家が取り組んでいます。その端緒はサイバネティクスという、通信と制御という観点から生物と機械を統一的に認識しようとする、第二次世界大戦後に生まれた新しい学問にありました。1968年に制作されたエドワード・イナトビッチの《Senster》(D)は、音環境と呼応して動き続けるサイバネティック彫刻です。SIAF2020では、この作品の復刻バージョンが、アジアで初めて展示される予定でした。

3年に1度の芸術祭の間に繋いできたSIAFラボは、2016年から継続的に開催している「さっぽろ垂氷まつり」で、環境メディアとしての「つらら」をテーマに、回転する大型のつらら彫刻を人工的に生成する装置や、3次元つららプリンターの制作など、さまざまなメディアアートの実験を行っています(E)。



D エドワード・イナトビッチ《Senster》
Photo: Natalia Kabanow
Courtesy of WRO 2019 / WRO Art Center



E SIAFラボ《回転式巨大つらら造形装置》2020
Photo: Tsubasa Fujikura



F 大友良英＋青山泰知＋伊藤隆之
《(with) without records》2017
Photo: Yoshisato Komaki

音も展示する

芸術というと視覚的なものを思い浮かべる人が多いかもしれませんが、音というメディアも、メディアアートにとっては最初から大きなテーマでした。空間全体を包み込む音には輪郭がなく、光や視覚とは大きく異なる特徴を持っています。SIAF2017では、ゲストディレクターの友友良英のセレクションで、自身らの《(with) without records》(F)を含む、さまざまなサウンドアート作品やパフォーマンスが展示演奏されました。なかでも、梅田哲也の《わからないものたち》(G)、毛利悠子の《そよぎ またはエコー》(H)、そして堀尾寛太の《補間》(I)は、音と身近な物体、音と空間や建築の関係を改めて問いかける、古くて新しいサウンド＝メディア・インスタレーションといえるでしょう。



G 梅田哲也
《わからないものたち》2017
Photo: Yoshisato Komaki



H 毛利悠子《そよぎ またはエコー》2017
Photo: Yoshisato Komaki



I 堀尾寛太《補間》2017
Photo: Yoshisato Komaki

A・B・F モエレ沼公園
E 札幌市資料館(旧札幌控訴院)
G 金市館ビル
H 札幌市立大学 芸術の森キャンパス
スカイウェイ
I 旧AGS6・3ビル
*B・EはSIAF関連イベント



ゲストディレクター対談

坂本龍一



大友良英

SIAF2017を坂本さんが視察で訪れたときの様子。会場となったモエレ沼公園にて

札幌国際芸術祭(SIAF)では第1回・第2回とゲストディレクターを招いてきました。SIAF2014は坂本龍一さんがゲストディレクターとなり、テーマとして「都市と自然」を掲げました。SIAF2017を坂本さんから引き継いだ大友良英さんがテーマに選んだのは「芸術祭ってなんだ?」。それぞれのテーマに込めた思い、芸術祭の目指したものを二人が振り返ります。

● ふたつのテーマはどう生まれたか ●

坂本 僕が札幌を最初に訪れたのは20代だった1970年代で、その時「ああ、ここは本州とは違うな」という印象が強くありました。この地に根差したアイヌ民族の文化、それがすぐそばにあるという歴史が作用した景色だと感じたんです。札幌国際芸術祭(以下、SIAF)のゲストディレクターになったときに、このことは紹介したいと思いました。

もうひとつ札幌の風景で特殊なのは、ここが近代になって人工的につくられた街だということ。原野にいきなり十字路を切り拓くことからスタートしたわけです。その結果、札幌は200万人近い人口を抱える都市にもかかわらず、すぐ近くに自然がある。こういう土地の特殊性も、2014年のSIAFのテーマ「都市と自然」を構想するきっかけでした。

それにやはり、2011年3月11日の地震・津波、そして

原発事故の衝撃。あの時の感情を絶対に忘れない、一生忘れない、という気持ちがありました。今もあります。

大友 僕はSIAF2014の《フェスティバルFUKUSHIMA! 北3条広場で盆踊り》に、アーティストとして参加させ



「フェスティバルFUKUSHIMA! 北3条広場で盆踊り」2014
Photo: Yoshisato Komaki

てもらいましたが、これも東日本大震災を受けて福島で始めた「プロジェクトFUKUSHIMA!」が2013年に盆踊りを始めたのがきっかけです。震災で福島から札幌に拠点を移していた農家の友人が、札幌でも盆踊りをやりたいと言い出してSIAFに直訴したのに僕は巻き込まれたんです(笑)。この盆踊りは、SIAFからも独立して(2020年こそ新型コロナウイルスの影響でできなかったけれど)、その後も札幌で毎年夏に「さっぽろ八月祭」として続いています。福島より規模が大きくなっちゃってびっくりしています。

坂本 SIAF2017でディレクターにと声がかかったときはどう思いました?

大友 困りましたよ……。だから「えっ、俺に? 芸術祭ってなに?」という驚きを、そのままテーマにしちゃいました。反則技みたいですけど(笑)。

芸術祭って美術家が専門のキュレーターがディレクションするのが通例だから、坂本さんがやられたのは画期的だと思うんです。坂本さんは芸術祭のディレクターをやることなんて考えていましたか?

坂本 後にも先にもこれだけです。今後も一生やらないつもりです(笑)。

大友 それは同感で、それくらい大変でしたね(笑)。だけど音楽家がディレクションした意義は大きかったと僕は思っているんです。芸術って美術だけではないですからね。「芸術祭ってなんだ?」っていうのは「芸術ってなんだ?」っていう問いかけでもあって。「音楽」って概念だって、明治時代に西洋から入った「Music」という語を訳した時に一般化したわけで、さも昔からあるように思われているけど日本ではそんなに古い概念じゃない。ちょうど札幌の町と同じくらいの歴史しかないんです。SIAFはそういうことをまとめてじっくり考えるいい機会だなと思いました。

● 都市のノイズとして ●

坂本 SIAF2017を訪ねて歩いて印象に残っているのは、路地に入っていったら若者がいっぱいいて。あれは……。

大友 音楽ユニットのテニスコーツが、芸術祭会期の約2カ月の間札幌に住んで、彼らの自由に好きなことを



テラコヤーツセンター「土砂」2017

芸術祭が開催された57日間、札幌市資料館の2階にある旧応接室に、テニスコーツのさや、植野隆司とMC MANGOが滞在し、来場者を巻き込んで様々なプログラムを展開した
Photo: Yoshisato Komaki

やってくれたプロジェクト《テラコヤーツセンター「土砂」》の関連イベントのひとつですね。

坂本 あの路地の感じがすごくよかったな。路地って都市にとってすごく重要でしょう? 札幌に行くたびに思うんだけど、大都市にもかかわらず、建物と建物の間がけっこうスカスカに空いているのね。路地というと、ニューヨークや新宿みたいに密集したイメージなので、札幌には路地をあまり感じなかったんですよ。ところがあの若者たちの一角にだけ、路地が出現していた。

大友 それは最高に嬉しい感想ですね。

坂本 路地という言葉が持つ、したたかさ、猥雑さがありました。そういうものが消えると、人類のクリエイションの力はなくなると思うんです。

大友 路地にあるのは都市生活におけるノイズだと思うんです。ノイズってのは本来意識されないものが可視化されることで立ち現れるもので、隠されていた何かが見えてきたり、違う価値を開く扉として機能したり。僕はテニスコーツにそういう状態をつくってもらいたいと思ったし、たぶん芸術祭自体がそういうノイズとして機能していくのがいちばんいいと思いました。

坂本 そうなんです。社会にとって異物にならないと存在理由はないですね、音を出す人間なんていうのは。

2014年に、鳥袋道浩さんが札幌の一番交通量の多い交差点に大きな石を置こうと言ったのね。さすがにそれはできなかったで、旧北海道庁の前に置いたのが《一石を投じる》ですけど、そういう異物が必要だと思います。

● 芸術祭の種を残す ●

坂本 島袋道浩さんの作品を旧道庁前に置き、初日に「カムイノミ」というアイヌの神聖な儀式をできたことは特に忘れ難い出来事でした。文化が異なる者同士の対話は、SIAF2014の他の作品にも共鳴するテーマです。

そして、SIAF2014で我々の拠点にしていた札幌市資料館に、その後ボランティアの人が毎月のように自主的に集まったアートカフェができた。僕も一度参加させてもらったけど、市民が自主的に、一過性に終わらないで場を持続させようとしてくれたことがいっぱい嬉しいかな。

大友 そのおかげで資料館のスペースは、SIAF2017でも拠点にできたんです。ここは象徴的な場所になっているなと思ったので、先ほど触れたテニスコートにも拠点にしてほしいとお願いしましたし、僕がSIAFに関わる大きなきっかけをつくってくださり、アドバイザーとしてとても重要な役割を担ってくださった札幌在住の音楽プロデューサーの沼山良明さんのアーカイブもここでやってもらいました。

そうやって少しずつ地層のように積み重なっていているのを感じながらやれたので、当時「2回目を引き継ぐのはどんな感じですか」と訊かれると「長男が苦労した分、次男はすごい楽にやっています」と冗談でよく言っていました(笑)。

● 世界がおなじ危機を通過したあとに ●

大友 坂本さんも僕もSIAFを通して「近代ってなんなんだ？」という問いかけをしていると思うんです。日本は「近代」を全部輸入文化として取り入れて、その上にいま立っている。間違った部分も含めて取り入れているかもしれない。それを問い直さずに、形だけ欧米型の芸術祭を整えてもしょうがないっていうところでは一貫していたような気がします。

坂本 その通りですね。2020年、3度目のSIAFが開かれるはずだった年に、自然のウイルスによって世界中で近代社会がガタガタになったわけじゃないですか。だからあるべき次の社会を真剣に考えるチャンスなわけです。

大友 そうですね、世界中が同じ課題に向き合うことになったわけですから。

坂本 だからSIAF2023は、それこそ形だけ整えたって意味がない。この先の数年で近代が見直され、人と自然との関係が検証され、その結果今までにない芸術祭ができる可能性があります。それは新しい都市や社会の形を提案するものになるかもしれない。市民のみなさんも、コロナ禍で精神的にも経済的にも落ち込んだかもしれないけれども、よりよい未来を築くんだという気持ちで参加してほしい。とにかく続けて開催してほしいですね。僕と大友さんが礎になったんだから(笑)。

大友 最初の坂本さんの話のように、札幌はまだ歴史的に若い都市で、だからこそ柔軟に変化できる気がしているんです。よくお題目のように言われる「市民参加」ではなくて、本当に札幌に住んでいる人たちが動かせる余地が他の都市よりあるような気がする。それは実際SIAF2017のときに肌で感じたことです。路地じゃないところを路地にできる可能性がある街だと思う。そういうところにすごく期待しています。

PROFILE

坂本 龍一

1952年東京生まれ。音楽家。1978年『千のナイフ』でソロデビュー。同年、細野晴臣、高橋幸宏と「YMO」を結成。散開後も、音楽・映画・出版・広告などメディアを越え活動。2013年は山口情報芸術センター[YCAM]10周年事業のアーティストディレクターとして、2014年はSIAF2014のゲストディレクターとしてアート界への越境も積極的に行っている。1990年より米国、ニューヨーク州在住。

大友 良英

1959年神奈川県生まれ。音楽家。実験的な音楽からジャズやポップス、また映画やテレビの劇伴作家としても数多くのキャリアを有する。近年は「アンサンブルズ」の名のもと、コラボレーションを軸に展示作品や特殊形態のコンサートを手がけると同時に、一般参加型のプロジェクトにも力を入れている。2012年には、「プロジェクトFUKUSHIMA!」の活動で芸術選奨文部科学大臣賞芸術振興部門を受賞。2017年はSIAF2017のゲストディレクターを務める。



SIAF2020 ディレクター

札幌国際芸術祭2020は、専門性をもったディレクター3名のチームによって進められました。新型コロナウイルスの影響を考慮し残念ながら開催を中止することになったSIAF2020に込めた思いをお聞きました。

- 1 SIAF2020のテーマに込めた思い
- 2 ディレクターチーム制とご自身の役割についての感想

1 将来にわたって、困難な社会的課題を抱える状況の中で、今一度自分自身が立っている場の歴史や文化を美術を通して見つめ直したい、と言う想いで取り組みました。



天野 太郎
企画ディレクター(現代アート担当)/
統括ディレクター

2 1人のディレクターが全てを決定するのではなく、3人のディレクターがそれぞれの立場で平等に合議によって物事を進めていく方法は大変良かったと思います。また、各会場の機関の専門家(学芸員)の参画は、当事者意識も高まり意義ある組織だったと思います。

1 このテーマは、札幌をはじめとする北海道の地域性や、地球的規模で人間と非人間の生活に影響を与える複雑なシステムを、アーティストやその作品を通して発見したいという、私の好奇心から生まれました。大地に張る根(roots)と大空に浮かぶ雲(clouds)の間は、人間の活動範囲であり、相互のつながりや価値観が共有される場所です。変化を見出すアートの力を借りて、私たちの歩む道のりを見つめ直したいという思いを込めました。



アグニエシュカ・クビツカ =
ジェドシェツカ
企画ディレクター(メディアアート担当)

2 ディレクターチームとして、意見を共有し、学び合い、共に創り、問いかけ、共通の課題や目標に取り組んだことは、芸術祭を公正かつ効果的にディレクションする貴重な経験となりました。また、SIAF2020のメディアアート部門の企画では、その歴史や鑑賞体験、分野の特徴などを重視しました。

1 雪の下に眠る根のように見えないものにも想いをはせ、空に浮かぶ雲のように形を持たないものにも価値を見出しながら、日々営む生活の時空間を超えて想像の枝根をのばし、未知のものごとや他者にも寛容でクリエイティブな対話の場を作りたいと考えました。



田村かのこ
コミュニケーションデザイン
ディレクター

2 3人で一つの芸術祭を構想するのは新しい挑戦でしたが、出自も経験も専門も異なるからこそ、お互いの能力を信頼・尊重し、豊かな思考を醸成できたと思います。人と文化とアイデアをつないでいく役割は、トランスレーターとしての私自身のあり方も拡張してくれました。

札幌国際芸術祭2014 (SIAF2014)

Sapporo International Art Festival 2014

テーマ

都市と自然

サブテーマ

自然 都市 経済・地域・ライフ

ゲストディレクター

坂本龍一

会期

2014年7月19日(土)～9月28日(日)
72日間

札幌では初開催となった国際的なアート・フェスティバル、SIAF2014。

世界で活躍するアーティストが参加し、これまでなかなか札幌で体験できなかったような作品やプログラムを、まち全体を使って展開しました。

ゲストディレクターは音楽家である坂本龍一さん。幅広い分野で活動する坂本さん自身の作品や、包み込むような「霧」を生み出す作品、子どもが体を使ってあそびながら楽しむ公園型の作品などが登場。

市民はもちろん、国内外からの多くの来場者が、まちの魅力とともに最先端の芸術を堪能しました。

札幌国際芸術祭2017 (SIAF2017)

Sapporo International Art Festival 2017

テーマ

芸術祭ってなんだ？

サブテーマ

ガラクタの星座たち

ゲストディレクター

大友良英

会期

2017年8月6日(日)～10月1日(日)

57日間

NHK連続テレビ小説『あまちゃん』の音楽を担当した大友良英さんをゲストディレクターに迎えました。大友さんがテーマに設定した「芸術祭ってなんだ？」という問いかけの答えをひとりひとりが探していくような、市民を中心とした芸術祭でした。

市内の子どもたちが中心となった「さっぽろコレクティブオーケストラ」や、市民から集めた布で作る「大風呂敷プロジェクト」など、準備段階から市民が参加。

芸術祭全体が一つのライブ会場のように連日何かがおきる躍動的な57日間となりました。

札幌国際芸術祭2020 (SIAF2020)

ウサ モシリ ウン アシカイ ウタラ サッポロ オッタ ウエカラバ
Usa Mosir un Askay utar Sapporo otta Uekarpa (アイヌ語)

Sapporo International Art Festival 2020

テーマ

Of Roots and Clouds: ここで生きようとする
シンリツ ニシクル
Sinrit/Niskur (アイヌ語)

企画ディレクター(現代アート担当)/統括ディレクター

天野太郎

企画ディレクター(メディアアート担当)

アグニエシュカ・クビツカ=ジェドシエツカ

コミュニケーションデザインディレクター

田村かのこ

会期

2020年12月19日(土)～2021年2月14日(日)
58日間

雪が積もる冬季の開催や、3名の専門家が集結したディレクターチーム制、地域の学芸員をキュレーターに起用するなど、これまでとは違う挑戦で準備を進めたSIAF2020。

しかしながら、新型コロナウイルスの影響を考慮し、やむなく中止となりました。

SIAF2020では札幌・北海道の自然や歴史、そして現在、未来に直面する課題を、大地に張る「根」と大空に浮かぶ「雲」と、その間にある世界に重ね合わせながら、「ここで生きようとする」すべての人々が芸術から社会を捉え直す場をつくりあげようとしていました。また、「アートメディエーション」という考え方のもと、芸術祭と鑑賞者をつなぐプログラムに芸術祭全体で取り組みました。

残念ながら実現することはできませんでしたが、記録集とウェブサイトを作成しSIAF2020の全容をまとめて公開しています。

残念ながら実現することはできませんでしたが、記録集とウェブサイトを作成しSIAF2020の全容をまとめて公開しています。



数字でみる S I A F

	SIAF2014	SIAF2017	SIAF2020
会場数	18会場	44会場	12 ^{*1} 会場
参加 アーティスト数	64組	151組	72 ^{*1} ^{*2} 組
作品数	214作品	697作品	—
来場者数	47万 8,252人	38万 1,697人	—
経済波及効果	59億 300万円	48億 9,100万円	—

*1…中止前の想定

*2…北海道立近代美術館、mima 北海道立三岸好太郎美術館、北海道立旭川美術館所蔵のコレクション作家25組を含む

中止



2023年が楽しみだなあ…

札幌国際芸術祭ってなに？

発行日：2020年12月19日 初版
2022年 1月3日 第2版

編集・発行：札幌国際芸術祭実行委員会／札幌市

イラスト・描き文字：中根ゆたか

制作・デザイン：STORK

助成：令和3年度文化資源活用推進事業



問い合わせ

札幌国際芸術祭実行委員会事務局
〒060-0001

札幌市中央区北1条西2丁目札幌時計台ビル10階
TEL: 011-211-2314 E-mail: info@siaf.jp

<https://siaf.jp>

Twitter: @SIAF_info
Facebook: @siaf2014info
Instagram: @siaf_info



用紙：b7バルキー（東日本大震災で被害を受けた日本製紙石巻工場で開発された復興支援商品）